The Dunciad について

—*Books I–III* と *Book IV* の比較—

岩　崎　泰　男

I

1728年までの過去15年間，Pope は Homer の翻訳，Shakespeare 全集の刊行に多くの時間と労力を費やした．しかしこの期間に彼の創作活動が全く停滞していた訳けではない．*The Dunciad* 初版巻頭の広告文 *The Publisher to the Reader* では次のように述べている．

> I have been well inform'd, that this work was the labour of full *six* years of his life, and that he retired himself entirely from all the avocations and pleasures of the world, to attend diligently to its correction and perfection; and six years more he intended to bestow upon it, as it should seem by this verse of *Statius*, which was cited at the head of his manuscript.[1]

Pope が実際この詩に6年の歳月を要したか否かは定かでない．彼一流の策略かもしれない．しかし，当時の人々の多くはそれを真面目に受け取っていたらしい．*The Dunciad* の解説書の一つとして当時出された *Curl's Key* の序文執筆者のように，「これは6日間で書かれたものかも知れない」[2]と疑った者もいた．それはとも角として，この詩の構想はかなり以前から纏められていたものらしく1727—28年の友人宛書簡[3]特に Swift への手紙では，しばしばそれについての言及がなされている．この作品の出版をいかに彼の友人達が待望していたかは Swift から Gay 宛への手紙によっても推察しうるのである．

Swift to Gay 26 February 1727/8

Now ... why does not Mr Pope publish his dullness, the rogues he mawles will dy of themselves in peace, and So will his friends, and So there will be neither punishment nor reward. ...

The Dunciad は遂に1728年3月現われた．久々の沈黙を破って放たれたこの巨弾は，Pope の輝やかしい創作活動の再開を告げる画期的作品であると共に，Augustan Age の文学界を一種の恐怖状態に陥し入れるものであった．この間の事情を Johnson は次のように語っている．

"It is certainly a true observation, that no people are so impatient of censure as those who are the greatest slanderers, which was wonderfully exemplified on this occasion. On the day the book was first vended, a crowd of authors besieged the shop; entreaties, advices, threats of law and battery, nay cries of treason, were all employed to hinder the coming out of *The Dunciad;* on the other side the booksellers and hawkers made as great efforts to procure it. What could a few poor authors do against so great majority as the public? There was no stopping a torrent with a finger; so out it came.[(4)]

このようにして出版された *The Dunciad* の初版は *Books I—III* までで，作中人物の名は asterisk で伏せるとか，C–l, L–t, Tho–d などのように頭文字で表わすとかして世人の刺戟を避けるように努めたが，翌29年に版を改めると，*Notes Variorum, Prolegomena* を新たに付し，作中人物の大部分を完全な氏名で表わした．いわゆる authorized edition である．*The Dunciad, Book IV* は *The Publisher to the Reader* での予告にもかかわらず，その後6年を経ても出版されなかった．実に初版刊行後14年の年月を経たのち，*Book IV* の積りで執筆したものを *The New Dunciad* の名を冠して独立した形で出版したのである．これは翌43年，旧 *Dunciad* と合体された．

さて，この14年間の彼の創作活動は実に精力的であった．*An Epistle to Dr. Arbuthnot* を含む数多くの書簡体詩，*An Essay on Man*, *Imitations of Horace* 等々彼の代表作の多くがこの期間に書かれたのである．この重要な14年間が *The Dunciad Book IV* にいかなる影響を及ぼしたか．この作品はやはり *Books I—III* の単なる続篇にすぎないのか．むしろ十八世紀の批評家 Joseph Warton のいうような「不幸なる付加物」[5]に堕しているのか．これらの諸点の考察が本論の目的である．

II

The Dunciad を Pope が執筆するに到った動機について彼の弁明を聞くことにしよう．*The Publisher to the Reader* でこう述べている．

> Not to search too deeply into the Reason hereof, I will only observe as a *Fact*, that every week for these two Months past, the town has been persecuted with Pamphlets, Advertisements, Letters, and weekly Essays, not only against the Wit and writings but against the Character and Person of Mr. *Pope*. And that of all those men who have received pleasure from his Writings ... not a man hath stood up to say one word in his defence.[6]

更にまた1729年の改定版の巻頭に付した *A Letter to the Publisher* でも同様の趣旨を述べている．

> It was upon reading some of the abusive papers lately publish'd, that my great regard to a person whose friendship I shall ever esteem as one of the chief honours of my life, and a much greater respect to Truth than to him or any man living, ingag'd me in Enquiries, of which the inclos'd Notes are the fruit.
>
> I perceiv'd that most of these authors had been (doubtless very wisely) the first Aggressors:[7]

末尾の署名は William Cleland となっており，Pope の理解者，同情者の筆になることを装ってはいるが，当時既に John Dennis が指摘し，[8] J. Sutherland もその文体の特徴から判断しているように，[9] Pope 自身の執筆であることに疑はない．彼がここで示そうとしたのは，*An Epistle to Dr. Arbuthnot*（1735年）で再び用いたのと同様に，被害者としての自己の立場の表明であり，自己防衛のための作詩という自己弁護であった．しかし鋭敏な十八世紀の批評家達はそれを文字通りに受け取る者はなかった．J. Warton は

> "Dryden's poem (*Mac Flecnoe*) was the offspring of *contempt*, and Pope's of *indignation:* one is full of *mirth*, and the other of *malignity*."[10]

と述べたし，Johnson ははっきりと

> "That the design was moral, whatever the author might tell either his readers or himself, I am not convinced. The first motive was the desire of revenging the contempt with which Theobald had treated his Shakespeare, and regaining the honour which he had lost, by crushing his opponent."[11]

と語っている．彼らは一様に Pope の個人的感情に発した報復とみなしたのである．恐らく直接の動機は個人的怨恨を晴す一念に発したものだろう．彼は十八世紀文壇に対する憎悪をかくすことはなかったが，同時にその倫理的正当性を証明しようともした．この時代の優れた文人達は Pope の不満と憤りを理解し，自からも鋭く感じていたが，しかしそれは少数にすぎなかった．

一例として John Dennis の *Remark Upon Mr. Pope's Dunciad*[12] について考察してみよう．Dennis は生涯 Pope と敵対関係にあった事を考慮する必要はあるが，この中で Dennis ののべた要点は凡そ三つにしぼることができる．

i) King of Dunces としての Tibbald (Theobald) を弁護し，Pope こそその地位に応わしい者として立証しようとしたこと．

ii) Pope の無智は彼以上に秀れた才能の持主を攻撃していることに示されていること．

iii) 最も重要な点であるが，Pope が the Art of Poetryに，特に Epic Poetry に無智であることを，*the Beastly Dunciad*, 及び *the Preface to his Translation of the Iliad* によって証明しようとしたことである．

特に Dennis が第三点に多くをさいて論じたのは，*The Dunciad* が *The Rape of the Lock* と同系列に属する mock epic であるためである．Warburton が書いたと思われる *Ricardus Aristarchus of the Hero of the Poem* で epic hero の特質として Wisdom, Bravery, Love を挙げ，the lesser epic hero 即ち mock epic ではその反対の Vanity, Impudence, Debauchery を指摘した.[13] Warburton はこの詩が epic の形式を借りた諷刺詩であることを示しているのである．しかるに Dennis は

Books, and the Man, I sing, the first who brings

The Smithfield Muses to the Ears of Kings. (The Dunciad, I. 1. 1–2)

を引用し，「Pope は書物の事を歌い，行動は歌わぬ」[14]とのべ叙事詩の特質として，Aristotle 以後伝統的に認められてきた action と probability の欠如を指摘し，*The Dunciad* を酷評したのである．Dennis の Epic についての知識が誤っている訳けではない．Dennis と Pope 両者の私的関係からみて，反対のための反対の感がなきにしもあらずだが，それを考慮に入れるにしても，Pope の諷刺をすべて見当違いの根拠なき罵倒として片付け，Pope の諷刺のこの時代に対する警告をきかず，その意義を認めぬ Dennis を含む同類の頑迷さは非難されねばならない．実に Pope が嫌悪したのは当時の文壇人の視野の狭さ，pedantry にあったとも言えるのである．

Pope の真の意図は，Sutherland も述べているように，[15] mock epic を

書くことではなく，この形式を利用して敵を諷刺することにあったと思われる．Pope の言葉を用いると，

> the Poem was not made for these Authors, but these Authors for the Poem.[16]

ということになろう．

Johnson は Pope の諷刺を poverty の嘲笑にあったという．

> "The great topic of his (Pope's) ridicule is poverty: the crimes with which he reproaches his antagonists are their debts, their habitation in the Mint, and their want of a dinner. He seems to be of an opinion, not very uncommon in the world, that to want money is to want everything."[17]

poverty のみの嘲笑では Pope がこの詩で扱った諷刺対象すべてを含み得ないと思う．*Books I—III* では出版者，著述家，批評家等，*Book IV* ではその他に，文人の保護者，dunces の崇拝者，追従者，哲学者，神学者，貴族，女王等多様の人物をその対象に取り上げている．この事から我々は，Pope の諷刺の目的は知的倫理的両面における正しい判断力の喪失，いわゆる Pope が良識（good sense, common sense）と呼ぶものの欠如にあると考えるのである．良識こそ真理，道徳，宗教の根源だからである．*Books I—III* では poverty は良識を喪失させる一原因ではあるが，むしろ我々は商業の発達と作家の良識こそ問題となっているのではないかと思うのである．

III

dulness を広義に解すると良識の欠如ということになるが，Pope はこの dulness を支持するものとして次の四つの virtue を示した．

> 'T was here in clouded majesty she shone;
> Four guardian Virtues, round, support her Throne;

Fierce champion Fortitude, that knows no fears
Of hisses, blows, or want, or loss of ears:
Calm Temperance, whose blessings those partake
Who hunger, and who thirst, for scribling sake:
Prudence, whose glass presents th' approaching jayl:
Poetic Justice, with her lifted scale;
Where in nice balance, truth with gold she weighs,
And solid pudding against empty praise. (Book I, 43–52)

Fortitude, Temperance, Prudence, Justice である．Epic hero に備わっているべきこの資質は，moch epic では ironical な，また paradoxical な意味をもつ，剛勇不屈の精神は出版者の厚顔無恥を，節制は著述家の著作への飽なき欲望を，思慮分別はその無謀さを，詩の正義は批評家の不公平さを示しているように思われる．*Books I—III* での各種の競技は彼らの知的倫理的頽廃を描くために巧みに考案されたもので，その各々は象徴的意味をもっているが，何故 Pope は彼等をそのような形で描かざるを得なかったのか．*Martinus Scriblerus of the Poem* は当時の社会的事情について大要次のように述べている．印刷術の発明以後，印刷用紙が廉価で入手しうるようになると共に，出版者は乱立し，商人化した著述家が巷に溢れんばかりとなった．これは国民の平和を乱し，かつその賞賛と金を無慈悲にも要求した．文学が貴族の専有物のみならず，中産階級のものともなると，出版の自由の旗印の下に出版業者は利潤の追求のために手段を選ばず，あえて不道徳をも公然と犯すようになる．中産階級の擡頭は知的要求度の低下を斉らし，同時に商人化した文人を生み出すことになる．この原因は Dulness と Poverty である．[15]

作家→出版者→読者（貴族階級）の関係においては，作家が主であり出版者は従であり，読者は供給される文学作品を一方的に吸収する存在であった．しかるに中産階級の擡頭，commercialism の発達と共に需要は供

給を凌駕し，従来の主従関係は読者（貴族と中産階級）→出版者→作家に転位した．出版者あるいは劇場支配人は作家が大衆の趣味にある程度妥協することで一致し，金銭的欲望の充足で手を結んだ．Pope の意識にはこの関係が浮んでいたと思われる．この状態から生じる結果，即ち彼等の良識の喪失こそ Pope の諷刺の目的であったと思われる．

Curl stretches after Gay, but Gay is gone,
He grasps an empty Joseph for a John!
So Proteus, hunted in a nobler shape,
Became when seiz'd, a Puppy, or an Ape.
To him the Goddess. "Son! thy grief lay down,
And turn this whole illusion on the town.
As the sage dame, experienc'd in her trade,
By names of Toasts retails each batter'd jade,
(Whence hapless Monsieur much complains at Paris
Of wrongs from Duchesses and Lady Mary's)
Be thine, my stationer! this magic gift;
Cook shall be Prior, and Concanen, Swift; (Book II, 119–130)

象徴的に描かれた出版者，著述家，批評家の各種の競技の中で，出版業者による詩人の捕え合い競争，China-Jordan (II. 157) すなわち寝室用便器を賞として賭けた一種の噴水競争は悪徳業者の利潤追求に対する厚顔無恥な姿を描いていると考えてよい．当時の悪習慣[19]となっていた凡庸作家の駄作に著名な作家の名を付して読者を瞞むく商道徳の頽廃，駄作を握って得意満面の悪徳業者を諷刺しているのである．

"He wins Patron who can tickle best." (Book II, 188)

と Dulness の女王に激励されて始められる著作家の探ぐり競争，フリート街の排水溝 (Fleet-ditch) での泥濘の中への飛込潜水競争は，貴族に対する著作家の追従，金と名声のためにはどのような不名誉な事でも平然と

行う無謀さへの諷刺と考えてよい．更にまた不快な騒音を競う作家の騒音競争はいかに群小の作家，雑文書きが世の平和を乱し，人を悩ませ，害毒を与る存在であるかを示したものと考えてよい．最後に行われる退屈な作品の朗読にたいし，誰が睡魔を最後まで防ぎうるかを競う批評家の競技は，金銭の重みで批評の秤を狂わせる彼等の姿を描くのではなく，ここでは Dunces の作品の無価値さを一層に強調する機能を果している．これらの諸点から判断し，Pope の *The Dunciad I—III* の目的は，commercialism の発達が良識の喪失を斉らし，それが商道徳の頽廃，文人のモラルの低下を惹き起し，結果としては文学の荒廃を招いたことへの憤りを諷刺の筆にたくすることであったと思われる．出版者 Curl が排泄物に転んで全身を汚す等の描写は ideas physically impure[20] であるという非難もあるが，現世の醜悪さを描いたものとして，真実性を有している．

良識の欠如と文学の質的低下はどのように結びついているかを考察しよう．

There motley Images her fancy strike,
Figures ill-pair'd, and Similes unlike.
She sees a Mob of Metaphors advance,
Pleas'd with the Madness of the mazy dance:
How Tragedy and Comedy embrace;
How Farce and Epic get a jumbled race;
How Time himself stands still at her command,
Realms shift their place, and Ocean turns to land.
Here gay Description Ægypt glads with showers;
Or gives to Zembla fruits, to Barca flowers;
Glitt'ring with ice here hoary hills are seen,
There painted vallies of eternal green,
On cold December fragrant chaplets blow,

And heavests nod beneath the snow. (Book I. 63–76)

上の引用は三つの文学上の問題を扱っている．その各々は *An Essay on Criticism, A Discourse on Pastoral Poetry* において Pope が既に論じたところである．その一つは true wit に対する false wit の問題であり，その二は伝統的劇法則の無視についてであり，その三は Pastoral における描写の矛盾についてである．

Pope が Figure ill-pair'd とか Similes unlike と呼んだものは，conceit を意味し，その特質は Wit's wild, dancing light (Bk. I, l. 153) で輝やいている．

Some to *Conceit* alone their taste confine,
And glitt'ring thoughts struck out at ev'ry line;
Pleas'd with a work where nothing's just or fit;
One glaring Chaos and wild heap of wit.

(Essay on Criticism, 289–92)

Pope にあっては，conceit は驚き，衝激，楽しさの感情を惹起する機能をもつ不自然な，こじつけの比喩であって，それは fancy の極端な自由の結果である．それは思想と感情の不調和であり，主題を偽り表現するものであると考えた．False Wit は知性の遊戯であり，詩における真摯さを失わしめるものという見解に立っていた．Pope のいう正しい wit とは

True wit I believe may be defin'd a Justness of Thought, and a Facility of Expression; or (in Midwives phrase) a perfect Conception, with an easy Delivery. Pope to Wycherley, Dec. 26, 1704 (21)

Nature を洞察し，その本質を把え，自然で正確な表現によって正しい image を与えることにある．Pope はそれを完全な懐姙 (perfect Conception) と安産 (easy Delivery) に譬えたが，同時に Conception で「概念作用」を，Delivery で「表現，伝達」を意味している．この場合重要な働きをなす人間の能力は奔放な想像力の飛翔ではなく，正しい判断力の働

きである．Johnson は *Lives of English Poets* の中でこう説明している．

It is apparent that wit has two meanings, and that what's wanted, though called wit, is truly judgment.[22]

また *The Dunciad Book IV* の註釈者でもあった *Warburton* は，

.....In the first line, Wit is used, in the modern sense, for the effort of Fancy, in the second it is used, in the ancient sense, for the result of Judgment.[23]

と語っている．この事から分かるように，false wit は正しい判断力の欠如以外の何物でもないことになる．

That not in Fancy's maze he wander'd long
But stoop'd to Truth, and moraliz'd his song:

(Epistle to Dr. Arbuthnot, 340–41)

詩は真理にかしづくものである．それは個人が正しい理性と判断によって得た普遍性ある経験を正確な描写で伝えることを使命と考えたがゆえに，思想が正しき証しを得るために，万人の認めが必要であった．だからこそ，Pope は文学において common sense の重要性を強調するのである．田園詩の序文である *The Preface of 1717* の中で次の如く述べている．

And it will be found true, that in every age, the highest character for sense and learning has been obtain'd by these who have been most indebted to them. For to say truth, whatever is very good sense must have been common sense in all times; and what we call learning, is but the knowledge of the sense of our predecessors.[24]

common sense の強調が，伝統の遵守に連がるのは当然であり，悲劇，喜劇についての Aristotle の三一致の法則の無視に対する非難もこの点から理解しうるのである．Pastoral における描写の矛盾についての指摘は The Guardian No. 40 (1713年) において既に Pope によって行われたが，彼の田園詩観は Rapin の古典的理論と Fontenelle の合理的理論の

綜合であり，それが *A Discourse on Pastoral Poetry* の骨子となっている．しかし事実は前者の古典的理論を主として守る者であり，

"the instructions given for any art are to be deliver'd as that art is in perfection.[25]"

その法則は論議の余地なき唯一の作家 Thoecritus や Virgil の実践から導き出されねばならないと主張する者である．この事からも Pope が古典の伝統を遵守する者であることが分かるだろう．描写の正確さとは矛盾をなくし，不自然さを避けることを意味している．彼は Ambrose Philips の田園詩について，その矛盾を指摘し次のように述べている．

When I remarked it as a principal fault, to introduce *Fruits* and *Flowers* of a *Foreign growth*, in descriptions where the Scene lies in our *own Country*, I did not design that observation should extend also to *Animals*, or the *sensitive Life*; for *Philips* hath with great judgment described *Wolves* in *England* in his first pastoral.[26]

(*The Gurdian* No. 40)

Books I—III では個人の知的愚かさを問題にするのではない．良識の欠如によって生じる知的倫理的諸現象をすべて dulness の言葉に背負わせている．Pope は commercialism の大波に呑み込まれようとする伝統的文学の崩壊の危機，悪書が良書を駆逐し，文学者の尊厳が失なわれようとする危機的状況に極わめて鋭敏であったといえるのである．Pope の貴族階級に対する憎悪は Swift 宛書簡にも述べられている．

Pope to Swift 23 March 1727/8

I despise the world yet, I assure you, more than either Gay or you, and the Court more than all the rest of the world.

しかしこの時点における Pope の注意は未だ，人間社会と知的世界の特殊な一部である十八世紀の文壇に主として向けられている．彼の憎しみが具体的に作品に表明されるのは *The Dunciad, Books I—III* 発表後の14年

間であった.

IV

1728年以後1742年 *Book IV* 発表に至る過程で Pope の興味の対象と作品の傾向は変化したと思われる. 従来狭い文壇の世界に注がれていた目は, 広い大自然に転じられ, Bolingbroke, Shaftesbury の影響をうけて著作したとは言え, 1733年及び34年の間に *An Essay on Man* を完成したのである. 彼の批判精神の現われとして, この時期の彼は数多くの Moral Essays を書き上げた. 彼は dulness に対する単なる嘲笑に満足せず, 自己の諷刺が依存する倫理的基盤を論理的に表現することに大きな関心を抱いている. 視野の拡大と共に, 取扱う知的世界も領土を拡げ, 諷刺対象も多様化したのである. *Books I—III* は未だ文壇の世界に限定され, その諷刺の対象もその世界の住民に限られていたし, dulness を嘲笑し, 攻撃するために, おかしさを増す工夫を凝すのに努力している. 作品全体は mock 的色彩が濃く, その味わいは *The Rape of the Lock* に近かったと言えよう. *Book IV* になると, むしろ理屈っぽくて, 抽象的問題を好んで論じ, mock epic というより, むしろ essay 的傾向が顕著となっている. ここでは文学のみならず, 教育, 神学上の問題を諷刺の対象に取り上げている. Pope は Spence に *Book IV* には教育論の積りで書くはずのものを挿入したと次のように語っている.

"What was first designed for an Epistle on Education, as part of my essay-scheme, is now inserted in the fourth book of the Dunciad.[27]"

1735年発表の *An Epistle to Dr. Arbuthnot* は, Pope の諷刺の指向する対象を暗示する点で興味深いものがある. ここでも貧乏文士とその仲間の諷刺のみが Pope の真の意図ではなく, むしろ貧乏に苦しめられることのない裕富な上流社会により大きな dulness を発見していたことが推察されるのである. この書簡体の諷刺詩での Pope の方法は階層的に悪徳

を追求することに示されている．Grub-street に棲息する poetasters の群から，成功せる成り上り詩人，更に追従と自己満足に溺れる貴族へと上昇的であり，最後に美徳の擁護者としての Pope と悪徳の具現者としての貴族 Sporus が対決するよう仕組まれている．これが Pope のこの作品の狙いであったと思われる．貴族の知性，品格，芸術鑑賞能力及びモラルの低俗さに対する攻撃は何にもまして峻烈を極わめる．dulness の崇拝者，悪しき文士，批評家，パトロン，更に教育者，哲学者，貴族，女王 Caroline を含む *The Dunciad IV* はこの作品の延長であり，拡大であるとも考えることが出来る．しかし *The Dunciad IV* は彼らのモラルよりも知的判断力を主として問題としており，文学，教育，神学に亙る知的領域を含む価値観転倒の世界を創造したことをその大きな特徴と考えるのである．

Book III の結びにおいて Dulness が万物を蔽うであろうと予言されたように，ここでは暗黒と混沌の the kingdom of the Dull が実現した．

Now flam'd the Dog-star's unpropitious ray,
Smote ev'ry Brain, and wither'd ev'ry Bay;
Sick was the Sun, the Owl forsook his bow'r,
The moon-struck Prophet felt the madding hour:
Then rose the Seed of Chaos, and of Night,
To blot out Order, and extinguish Light,
Of dull and venal a new World to mold,
And bring Saturnian days of Lead and Gold. (Book IV. 9–16)

この世界は Pope が *An Essay on Man* で描いたような秩序と調和，理性と良識の支配する世界ではない．この世界の特質は *An Epistle to Dr. Arbuthnot* でも述べられたように一種狂気であり，The Dog-star rages (*Arbuthnot* l. 3) する世界である．知性は dulness の前で輝やきを失う．秩序は破壊され，一切は混沌の中に在る．それはすべての意味で anti-natural な世界である．

"O *Cara! Cara!* silence all that train:
Joy to great Chaos! let Division reign:
Chromatic tortures soon shall drive them hence,
Break all their nerves, and fritter all their sense:
One Trill shall harmonize joy, grief, and rage,
Wake the dull Church, and lull the ranting Stage;
To the same notes thy sons shall hum, or snore,
And all thy yawning daughters cry, *encore.*
Another Phoebus, thy own Phoebus, reigns,
Joys in my jiggs, and dances in my chains. (Book IV. 53–62)

不協和音がミューズの神々を苛立たせ，追払う．顫音は歓喜，悲哀，憤激を同時に奏でる．「調和から，天上の調和から，この宇宙の組成は始まった．調和より調和へと，あらゆる範囲の音調を通じて，それは走り，旋律は人の心に迫った」[28] と Dryden が歌ったように，自然万物は部分が全体を形造るために，秩序と調和を守っている．これは人間社会，芸術，文学にも適応すべき根本原理であると Pope は信じた．

First follow NATURE, and your Judgment frame
By her just Standard, which is still the same:
(Essay on Criticism, 68–69)

しかるに Dulness の王国では不調和こそ，それらの根本原理となっている．人々は宗教的，道徳的，国民的義務を忘れ，怠堕と逸楽に耽るのである．このような世界で施される教育は無価値であり，世の役に立たぬと Pope は述べたのである．Warton は十八世紀の教育を弁護し，Pope の誤解を憤って，

Pope perhaps "adopted this false opinion from that idle book on education, which Lock disgraced himself by writing."[29]

と述べたと言う．それはともかくとして，当時の教育は「諸学問の間をす

ばやく通過して何も身につかない．ただ偶然覚えた言葉で議論を行い，詩を作って人々を悩ますにすぎない」と考えた．

We only furnish what he cannot use,
Or wed to what he must divorce, a Muse: (Book IV. 261–62)

With the same Cement, ever sure to bind,
We bring to one dead level ev'ry mind. (Book IV. 267–68)

この痛烈な教育批判が正当なものであったかどうかは別にしても，現代においてもなお聞かれうるこの叫びは，彼の鋭い洞察力を示していると言わなければならない．教育の無有用性は dulness の世界の一属性としてふさわしいものであろう．

この世界を支配する神は Dulness の女神であり，ここでは他の神の存在は許されない．有名な Pope のFreethinkers 批判が行なわれる．Pope が *An Essay on Man* で理神論者であると非難されたこともあって，ここでは特に強力に自己の立場の弁護を行うと共に，理神論批判に熱心である．

All-seeing in thy mists, we want no guide,
Mother of Arrogance, and Source of Pride!
We nobly take the high Priori Road,
And reason downward, till we doubt of God:
(Book IV. 469–72)

引用の詩に付した Pope 及び Warburton の註[30]によると，現世界の諸現象から神の永遠性を演繹する人々は，神についての十分な概念に達し得ないとしても，人間を創造した神の目的と人間が幸福をうる手段を知るにふさわしいだけの神に関する知識は得ることができる．しかしこの演繹的方法を取る者は大低人間創造の目的を曇らせる霧の中に迷ってしまう．反対に *a visible World* から *an invisible God* を推論せずに，（自己の想像から形而上学の原理に適う属性を有する）*an invisible God* から *a visible*

Word を論ずる者は，現世の悪を説明しえぬゆえに神を疑うと述べている．即ち dulness の世界にはその女神以外に神は存在し得ないのである．

Or, at one bound o'er-leaping all his laws,
Make God Man's Image, Man the final Cause,
(Book IV. 477–78)

この二つの態度を批判するとき，Pope は神への敬虔さを忘れた人間理性の絶対視，Arrogance と Pride を諷刺し，Chains of Being を構成する一環としての人間能力の限界を説く．過度に陥入らず節度中庸を守る，これが Pope の言う良識であり，十八世紀の美徳であった．

Pope の世界観，文学観の基本には常に全体との調和，全体と部分の関係が重視されている．これは Bentley の批評態度への批判においてもそうである．彼は Bentley の知性を疑うのではない．その近視眼的態度，verbal criticism を愚弄するのである．

The critic Eye, that microscope of Wit,
Sees hairs and proes, examines bit by bit: (Book IV. 233–34)

同一の指摘は既に *An Essay on Criticism*, *An Essay on Man*, *An Epistle to Dr. Arbuthnot* においても行われた[31]．部分の重視は全体の姿を正確にとらえ得ない．ここに全体の調和を無視した混乱の原因があると考えるのである．このような部分を重要視する態度は，万物の中での人間中心的考えに通じるものであり，それは十八世紀における pride と言う罪をうむ態度であった．

V

Pope の *The Dunciad IV* はこのように主として人間の知的領域の数々を取扱い，それを Pope が自己の世界観との対比において論じた所に，*The Dunciad I—III* との大きな相違が見い出される．それは彼が *Book IV* を執筆する以前に，*An Essay on Man* を書いた知識と経験が大いに

役立っているのであろう．またこの詩で用いた調和と混沌の対比という手法は，既に彼が *Windsor Forest* の詩で用いたものであり，Pope の得意とするものであった．その詩において彼は pastoral と anti-pastoral の特質[(3)]を対比させ，pastoral 的表現と手法で英国の栄光と平和を願い，他方において人間社会の歴史的変遷を示しながら，一度神の秩序と摂理に反する暴君が現われるや，黄金の野は灰色の荒地に変り，万物は死滅し，人間は豊かな穂りの中で餓死するに至る暗黒の様相を描いたのである．

以上の考察を通じ，我々は *The Dunciad Book IV* が単に *Books I—III* と同質の続篇ではなく，故に Pope が *The New Dunciad* という形で独立に出版した意図も理解できるのである．*Books I—III* 発表以後の作品が抽象的諸問題を好んで取扱う様になり，笑の要素を減じ，知的要素を増加させて行ったことが，エラスムスの「痴愚神礼賛」に流れる人間に対する温かな思いやりを奪う原因ともなっている．それはまた攻撃と反攻にあけ暮れた十八世紀文壇の特殊事情によるものであろうし，幾分かは不具であった事による性格的な原因にも帰することができよう．

Pope の *The Dunciad Book IV* は決して「不幸な付加物」ではない．これなくして Dunces の世界は完成しないのである．*The Dunciad,* それは Pope の詩に関する総てを含んでいる．彼は *Book IV* の作詩を最後にして1744年5月その苦闘の生涯を閉じた．

註

(1) Alexander Pope: *The Dunciad,* ed. James Suther land (London: Methuen & Co. Ltd., 1943), pp. 204–5.

(2) *Ibid.*, p. 404. Foot-note.

(3) *The Correspondence of Alexander Pope*, ed. George Sherburn (London: Oxford at the Clarendon Press, 1956), vol. II.

cf. Pope to Swift (? January 1727/28)

Bolingbroke and Pope to Swift (February 1727/28)

Pope to Swift (23 March 1727/28)

(4) Samuel Johnson: *Lives of the English Poets* (London: J. M. Dent & Sons Ltd., 1958), vol. II, pp. 178–79.

(5) *Discussions of Alexander Pope*, ed. Rufus A. Blanshard (Boston: D. C. Heath and Company, C 1960), p. 11.

".....But in the year 1742, our poet was persuaded, unhappily enough, to add a *fourth* book to his *finished* piece, ..." Joseph Warton: *An Essay on the Genius ond Writings of Pope.*

(6) *The Dunciad*, pp. 202–3.

(7) *Ibid.*, pp. 11–12.

(8) *The Critical Works of John Dennis*, ed. Edward Niles Hooker (Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1943), vol. II, pp. 369–70.

(9) *The Dunciad*, p. xxv.

(10) *Discussions of Pope*, p. 12.

(11) *Lives of the English Poets*, vo.l. II, p. 225.

(12) *The Critical Works of J. Dennis*, pp. 353–76.

(13) *The Dunciad*, p. 256.

(14) *The Critical Works of J. Dennis*, p. 361.

(15) *The Dunciad*, p. xlii.

(16) *Ibid.*, "The Publisher to the Reader", p. 205.

(17) Hugo. M. Reichard, "Pope's Social Satire: Belles-Lettres rnd Business," *Essential Articles: Alexander Pope*, ed. Maynard Mack (Hamden, Connecticut: Archon Books, 1964), pp. 691–93.

Reichard も Johnson の Porerty 説を認めぬが，彼は貧乏文士は上流階級の人々をあざける引立役として用い，両者を並列させることで両者の類似を発見し，人間の価値は金銭の有無でなく彼の道徳性にある事を Pope は示しているとのべている．

(18) *The Dunciad*, "Martinus Scriblerus, of the Poem," p. 50.

(19) *Ibid.*, p. 112. Foot-note.

(20) *Lives of the English Poets*, vol. II, p. 225.

(21) *Correspondence of A. Pope*, vol. I.

(22) *Lives of the English Poets*, vol. II, p. 150.

(23) William Empson, "Wit in the Essay on Criticism," *The Structure of Complex Words* (London: Chatto & Windus, 1952), p. 93.

(24) Pope, "The Preface of 1711," *Pastoral Poetry and An Essay on Criticism*,

ed E. Audra and A. Williams (London: Methuen & Co., Ltd., 1961), p. 7.

(25) Pope, "A Discourse on Pastoral Poetry," Audra and Williams (ed.) *Ibid.*, p. 29.

(26) *The Dunciad*, Appendix (V), p. 224.

(27) *Ibid.*, p. 149, Foot-note.

(28) E. M. W. Tillyard: *The Elizabethan World Picture* (London: Chatto & Windus, 1960), p. 94.

"From harmony, from heavenly harmony,
This universal frame began;
From harmony to harmony
Through all the compass of the notes it ran.
The diapason closing sull in man."

(29) *The Dunciad*, p. 356, Foot-note.

(30) *Ibid.*, pp. 386–87, Foot-note.

(31) An Essay on Criticism, 11. 244–46.
An Essay on Man, Epistle I, 11. 193–4.
An Epistle to Dr. Arbuthnot, 11. 165–170.

(32) Yasuo Iwasaki: "Pastoralism in Pope's *Windsor Forest*," 人文学 No. 75. (同志社大学人文学会, 1964) 参照.